



ものづくりは『歌』づくり  
歌づくりは『もの』づくり

東大阪 卓上日記の匠  
人生八十年の記録

高原 成國

# 東大阪 卓上日記の匠 人生八十年 の記録：ものづくりは『歌』づく り 歌づくりは『もの』づくり

高原 成國

## 目次

はじめに

大阪（東成）在住編

誕生

中浜から豊後荻町へ

戦争の終わり

文武両道

荻での生活

再び大阪へ

出稼ぎと決断

独立

クロス張り機の導入

妻との出会い

東大阪編

東大阪へ

全自動ライン導入

卓上日記の誕生

バブル経済の崩壊

親兄弟の絆

## 第二の人生編

歌仲間との出会い

地域のボランティア活動の矢先・・・

火災によるさまざまな変化と別れ

80歳からのスマートフォンでの出会い

『匠の街』で健康体操

妻への想い

第2の故郷、豊後荻町を訪ねて

人生を振り返って思うこと

## 第三の人生の挑戦

シニアのベンチャーとして

平成28年6月 第1号 元気日めくり365 を販売開始。

平成28年10月 第2号 元気日めくり365（木製版）開発・発売。

平成29年5月 第3号 卓上日記型メモラビール365 開発・発売。

あとがき



# はじめに

私は八十歳を迎え、子どものために残す財産ありませんので、せめて高原家の系図の中で、私の八十年の波瀾万丈の人生を語ってみたいと思いました。

私はただ一生懸命生きるために過去を振り返らず、前を向いて頑張ってきました。

## 高原 成國

大阪（東成）在住編

# 誕生

私、高原成國は昭和8年10月13日 父・達潤、母・玉京の9人兄弟の次男として大阪府大阪市東成区中浜において出生した。

昭和8年といえば、国内では現在の天皇陛下である今上天皇明仁、当時の皇太子が誕生され、国外ではイギリスのネス湖で未確認生物ことネッシーの報道があつた時代である。昭和16年大阪市中浜国民学校（現在の小学校）に入学し、勉学に励んでいたところ、それから5年後の昭和21年、第二次世界大戦が開戦。世の中が戦争一色へと変貌していった。

私はまだ小学5年生だったので、戦争に出兵させられるなどといったことはなかったが、東京では空襲があり、福井県小浜市に学童疎開をすることになる。学童疎開する直前には大阪にもB29が飛来して被害を受けていた。当時はクラス全員が男子の時代で、5年生全員と学年の教師1名で疎開したのだが、疎開先は私が住んでいた東成と比べると大変田舎であつた記憶がある。

ただ何よりも鮮明に覚えているのは大阪では一度も降らない雪が降っていたことだ。福井の街のイメージを聞かれると、今でも疎開先で見た雪を思い出す。疎開先では私たち子どもの世話を地域の人たちが見てくれ、宿泊はクラス単位で雑魚寝といった生活だった。

## 中浜から豊後荻町へ

私が福井県に学童疎開している当時の大阪は、森之宮に軍需工場があつたのだが、爆破され焼け野原になるようなところであつた。そんな中、家族8人（当時）が外国に疎開するための荷物を南港に預けていたので、長兄が荷物を見に行った所、荷物を始めなにもかもが爆破され、跡形も無く消し飛んだ。

それを聞いた家族は全員啞然とし父親は行く宛てもなかったが、九州へ疎開することを決断して、私は前述したように学童疎開で福井県に疎開していたので、疎開先から呼び寄せられ、一家全員で別府までとりあえず行くことになる。

別府では旅館に3泊し、以前に父親と交流のあった大分県の金丸さんという方に連絡し、現状を伝えることにした。それを聞いた金丸さんは荻町（現在の大分県竹田市荻町）に行けば、なんとか力になると父に行ってくれたようで、荻町で家族全員、金丸さんに迎えてもらい、それ以降は金丸さんの奥さんに世話になることになった。

しかし、大阪から家族8人、命からがら逃げてきたので、お金も無く、当初は全くと言って言いほど相手にしてもらえなかった。そこで母が、大阪で闇市の肉や鍋、釜の小商売をして貯めたお金を腹巻の中から出して、「家族全員8人が一年間食べるための米をわけてほしい」と言うのと、それで信用したのか、態度が一変し、住宅と農業をするための農地や牛を買わせてくれることとなった。

# 戦争の終わり

私は荻町の国民学校に編入し、6年生として勉学に励んだ。自宅と学校との距離は10キロほどあり、バスも電車もなく、また山岳地域のため、自転車で通うこともできなかった。毎日往復2時間の通学はわら草履を履いて歩いて通学していた。通学するのに2時間、果てしない道のりであったが、雨天時は蓑を纏って、竹の皮で作った帽子の笠を被って2時間かけて通わなければいけないのでそれは、それは大変であった。

昭和20年8月6日に広島、続いて8月9日に長崎へ、米軍による原子爆弾の投下によって、人類史上最悪の日が日本で立て続けに起こってしまった。



そして同年8月15日、日本は降伏し、第二次世界大戦に敗戦、長かった戦争がようやく終わった。当時情報と言えば唯一ラジオのみだった。

今でもふと思うことがある。もし私が3年早くこの世に生まれていれば、今の私はいなかったであろうと。このたった3年、それが意味するものは戦争に出兵するための年齢である。私の兄が2歳年上であつたが、兄もあと1年早く生まれていれば戦争に出兵しなければならなかった。

当時戦争で亡くなった人たちに対し、私は可哀想だと感じてしまう。しかし、戦争で日本のために戦い、命を落とした人たちのために、この世の幸福を祈り、私は精一杯生きなければならな

いと誓った。

この頃、荻町に疎開してちょうど1年が経過していた。そして、国民学校を卒業した。日本が敗戦したことにより、アメリカのダグラス・マッカーサー連合軍最高司令官が日本に上陸した。

敗戦を機に、日本ではさまざまなことが変わった。その中でも私は学生だったからか覚えてるのは、6・3制（現在にも引き継がれる教育システムで小学校6年、中学校3年の義務教育の

こと）への移行である。

日本が敗戦したことも、6・3制の施行やさまざまな情報はラジオを通して手に入れていた。それほどラジオは世間の情報を知ることができる唯一の手段であり、重宝されていた。私はこの6・3制が始まった年に中学一年生に入学、新制度が施行されて、第一期となる新制中学生になった。

## 文武両道

一九四〇年代は「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた古橋廣之進氏が日本を代表する水泳選手で、世界でも有名であったため、スポーツといえば、水泳であった。私も彼に憧れ、中学校で水泳部に入部し、練習に励み、少しでも水泳が成就になればと努力を重ねた。

その結果、荻町で優勝し、大分県直入郡の郡大会に出場することになった。出場にあたって、現在のような海水パンツなどはなく、ふんどしをつけて参加しなければいけなかったのだが、そのような物を持ち合わせていなかったため、父が名入れのタオルに紐をつけたものを作ってくれ、それを身につけて大会に出場した。それ以降の大会は交通費、宿泊費がかさむため、断念し

たが、水泳も続けていれば、現在とはまたちがう人生になっていたかもしれない。

水泳の話ばかりで運動しかできないように捉えられるといけないので、私事ではあるが、勉強も良い成績を残していた。現在は算数の授業でも電卓が使われると聞いたときは驚いたが、当時そのような便利な機器はなかった。授業ではそろばんが使われ、そのそろばんの大会が中学校であつたのだが、私は水泳と同じく、そろばん大会でも優勝し、郡大会に出場した。

# 荻での生活

この中学校で私の生涯の信条となる

- 一、 真実一路に生き
- 一、 不断に研鑽を積み
- 一、 日々勤労樂しみ
- 一、 住み良き社会を造らん

と出会った。

この頃になると、農業で一家を支えるのは村一番の働き者、長兄であった。しかし、両親と兄弟9人が生活するには十分とは言えず、父は牛を育て、熊本県の赤牛の品評会に出展し、幾度となく優勝したので、その牛を売って生活費の足しにしていたが、満足な生活とは決して言えなかった。

この頃、3人の弟と妹が生まれ、家族が両親も入れて11名となる。兄弟の中で9人目となる、一番下の弟が産まれてから100日たった頃、母は病気になり、3年間寝たきりであったが、食事は十分に取ることができた。しかし、寝たきりであったため、その間はすぐ下の妹が親代わりとなり、3年間弟の育児をし、「お母さん」と呼ばれていた。

当時の食事はごはんのみそ汁とたくわん。その他にも幸い農業をしていたので、野菜には困らなかったが、たまに闇市で買ってきたイワシが食卓に並ぶとそれは大変なごちそうであった。

そんな日々の中で私の楽しみと苦手なものを紹介しようと思う。楽しみというのは、私が動物を大変好んだので、「ポチ」と名付けた犬を大切に育てていたことだ。現在は犬も家族の一員として大切にしている人がいるようだが、私とポチは人間と犬であったが、仲が良かった。

また苦手なものといえば、農業をしていると当時は重機など便利な機材がなかったので、牛が最大の動力ということもあり、我が家でも牛を飼っていたのだが、この牛小屋の清掃が『苦手』という言葉一つで表せないほど嫌だった。水泳、そろばん、勉学と励んできた私もこればかりはしたくないので、逃げ回っていた。



## 再び大阪へ

そんな生活をして暮らしていると、私は「このままではいつか生活をしていけなくなるので、私一人だけでも家から出稼ぎに出て自立することで、少しでも家族を楽にすることができないだろうか」と考えることが多くなった。そのようなことをずっと考えていると、大阪に町工場を経営している親戚の製本会社社長が住んでいたことを思い出す。

私はすぐにその親戚の工場へ住み込みで働きに行きたいと両親に申し出た。すると両親は反対することなく、親戚に私が大阪の町工場で働きたいので世話をしてもらえないだろうかと掛け合ってくれた。当時の製本業界は人手がほしいのもあり、快く承諾してくれた。

こうして私は17歳で萩町を後にし、再び生まれ故郷である大阪へ戻ることとなる。第2の故郷である萩にはこの後何十年と戻ることはなかったが、この時抱いた「私一人だけでも独立して少しでも家族を楽にできないだろうか」という気持ちはこの頃考えて、大阪でしつかりとした夢へと結びつくこととなる。

# 出稼ぎと決断

出稼ぎに來た当初は、それは大変であつた。朝8時から夜の10時まで親戚の製本工場に住み込みで働き、機材の横で布団を敷いて寝た。また翌日起床して働き、寝る。その繰り返しの日々である。風呂に入ることができるのは週に1、2回。休みは月に2日程度しかなかったが、玉造の日の出通りで映画を見ることがだけが唯一の私の楽しみであつた。

当時の1カ月の給料3千円で、そのうち2千円を両親に仕送りしていたので、残り千円の中で250円の映画を見るのは月に一度しかできない私の贅沢でもあつた。

私が大阪へ出て来て1年が経った頃、すぐ下の妹も製本工場で共に働くことになった。

現代の若者たちは仕事に自信や責任がなく、自分の好きなことにしか興味がないなどと聞く。しかし私は生活をしていくために技術を覚えることに必死であったため、趣味等に打ち込む時間がなかったが、同じ工場で働く20代の従業員たちよりも仕事に励んだと自負している。

そんな生活を3年間休むことなく、仕事に励んでいたことで、一つの転機を迎える。独立のチャンスがおとずれた。

# 独立

独立するきっかけは長兄の結婚のために何度か大阪へ来ていた父が、住み込みで苦勞している私を見て、「経験も積んだのだから従弟と共同で事業を始めてみてはどうか」と言ってくれたのが最初のきっかけであった。

こうして昭和29年、私が20歳の時に東成区（玉造）の5坪ほどの路地で三和製本所を開業・独立。工場は住宅街の中に構えていた。従業員は私とすぐ下の妹、そして従弟は共同と言いつつも出資だけだったので、実際に働いていたのは私と妹の2名であった。幸い住居は私の独立に備えて、あるいは九州から家族がまた帰って来られるようにと考えた父が東成区に購入したので、そこで荻町から出てきた家族全員と共に生活していた。

大分から家族が全員出てきた時、家族で農業をして作ったお米を家族11名が食べられる2年分の量を持って出てきたのには驚いた。

以前の職場（製本所）で働いていた時に得意先であった、岡本ノート株式会社から注文を受けていたが、当初はなかなか注文してもらえず、先方の会社まで朝早くからお伺いし、掃除を手伝い、時間が余ると注文をもらえるまで帰らないで居座り続けた。すると、その行動を見た先方は私を見かねて、夕方5時頃、注文をくれ、それまで工場で留守番をしていた唯一の社員の妹と二人で日付が変わる夜遅くまで働き、帰宅するような日もあった。そんな時間帯に帰宅し、食事をしていると、私たちが帰る時には既に寝ている父親に物音が聞こえ、「うるさい」と言われることもあった。

私は本来無口で口べたであったが、仕事をもらうために得意先に行って「私は無口でして、口べたなので…」が通じるはずもない。だから仕事をもらうためには頭も下げたし、口べたでも下手でもいいから一生懸命しゃべって、話すようになった。おそらく私の言っていることが先方に通じていたか、自信はないが、生きていくためにはしたくないことでもしなければならぬ。私の言葉は通じていなくても、私の熱意は通じたはずだ。

# クロス張り機の導入

独立するためにはなにが必要であろうか。

たくさん必要なものはあるが、工場場所は賃貸で借り、仕事を始め、機材や工場等の初期費用は得意先である岡本ノート株式会社が私を信用して保証していただいたことで、大正銀行から三百万円を借り入れることができ、その資金で購入した。

三和製本所の開業から3年後の昭和32年、東成区の小橋に拠点を移し、50坪に工場の規模を拡大・移転した。この移転に伴い、従弟は退いた。また規模拡大の際、屋号を三和製本所から



高原製本所と変更した。

この頃になって、ようやく生活が安定してきた。昭和35年会社になってから家族が大阪へ出てきたことで、兄弟は私の会社で働いてくれた。その後、妹たちは嫁入りし、兄だけは総務として金銭の管理をし、社員の人たちからも専務と呼ばれていたが、その他の兄弟たちにはさまざまな業種に独立できるよう働きかけた。

長兄は私の会社で総務に、弟は独立、その下の弟も喫茶店を開業、そして末っ子は現在でも製本工場を経営している。

独立当初は板に刷毛でのりを塗ってノートの背中のクロスを一枚一枚、ノートに貼り付けていた。しかし、創業してから日本は高度経済成長期に入り、受注も増え、その方法では生産が間に合わなく、急げば急ぐほど、品質の保証ができなくなりつつあった。

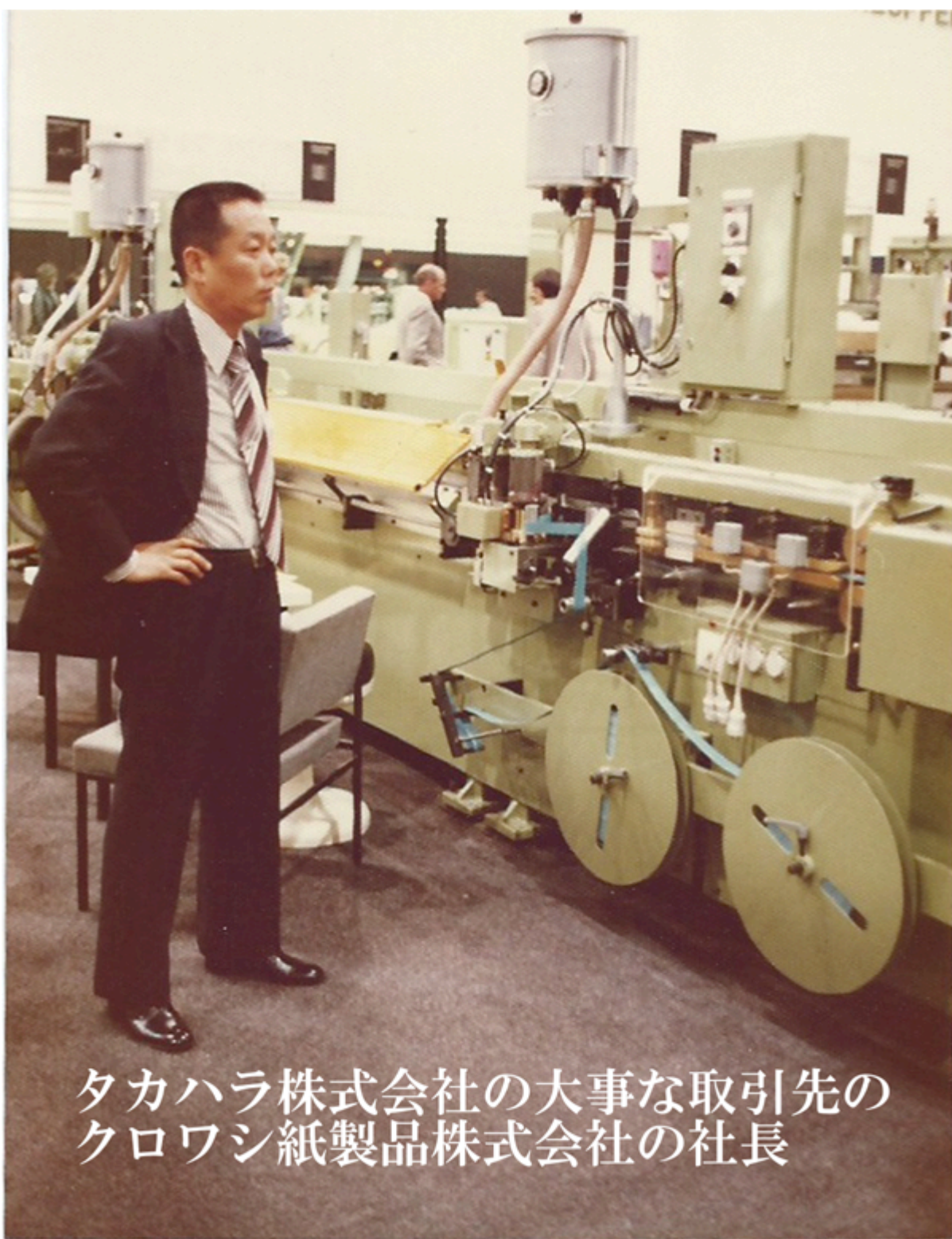
この頃、三和製本所は『高原製本所』と社名を変更し、25歳になった私は単身ドイツへ足を運び、自動クロス巻きの機械を購入、導入することを決意した。そして帰国する際にドイツの技術者を伴って、日本で技術の指導を受けた。この技術導入は日本では高原製本所が日本初であ

り、その後、この技術導入により、多くの受注生産ができ、急成長を遂げることができた。



昭和40年代にドイツにて





タカハラ株式会社の大事な取引先の  
クロワシ紙製品株式会社の社長

ちなみにこの時、お世話になっている方々へドイツ土産にボールペンを購入したのだが、日本に帰ってから配ると『MADE IN JAPAN』と書かれていたらしい。読み書きができない私にはわからなかったために恥をかいてしまった。しかし、遠く離れたドイツにも日本の技術はあるのだと感心した。



世界で唯一の技術展である  
ドイツの「ドルッパ展」にて





「ドルッパ展」「CCCCドルッパ展」「ドルッパ展」

お世話になっている社長と  
「ドルッパ展」参加



# 妻との出会い

この時、私は26歳になっていた。受注が増え、工場の規模拡大と私にとって追い風であったこの時期に、私は生涯の伴侶を得ることとなる。

妻の年子である。当時、私の父が町会に出席した際、お茶くみをしていた女性がたいへん健気で父の目に留まったらしい。その女性は若干23歳であったが、「私の息子の嫁に来てくれないだろうか」と声をかけたそうだ。そこで父から同じく町会に出席していた嫁の父に対し、私が事業を起こし、頑張っていることを話すと、嫁として娘を出すことを了承してくれ、私と初顔合わせすることになる。

この時代はお見合いや親が縁談の話をもつてくることがよくあった。妻の父はミシン関係の事業をしていて、妻は週に一度姉妹で宝塚に行き、歌劇を見るといった良い家庭環境で妻は育ったようだ。それが、外見や人柄に現れていたのか、私が妻を見た第一印象は小柄で可愛らしく、優しそうな気遣いのできる女性であると感じ、顔合わせで一目見て気に入ってしまった。

その後、日曜日のとある日に遊びの誘いに行ったが、妻は隠れて出てきてくれなかった。どうやら恥ずかしかったようで、妻の弟が私たちの仲を取り持ってくれて、二、三度映画を見に行くことができた。

そして結婚、その後は妻には家庭や私の仕事のこと、さまざまな面で支えてもらい、今でも頭が上がらないぐらい感謝している。妻に感謝していることの一つは、当時20名いた従業員の食事を毎食作ってくれていたことである。その中の10名は住み込みで働いていた。



# 東大 阪編

## 東大阪へ

独立した時代背景は高度経済成長期ということもあって、どこもかしこも人手を募集していたことと、独立し始めたばかりで私の工場は規模も小さかったため、新聞や紹介所（現在のハローワークのような施設）で働き手を募集したのだが、思うように集まらなかった。

思い返すと、会社を経営していく上でたくさん壁にぶつかったが、働き手を探すことがなによりも苦労した。しかし、兄弟が手伝ってくれたので人手に関してはなんとかやっていくことができた。この20名のうち、兄弟が3名、大分県の中学校の後輩が5、6名と大分から働きにきた者が大半であった。その中でも大分から集団就職で働きにきて断裁機で指を怪我した方は70歳の定年になるまで働き、支えてくれた。



このような時代背景の中で、工場の移転と拡大を決めた。この決断をした時、東大阪に移転することにしたきっかけは、受注が増えたことにより、場所が狭く感じ、生産が間に合わなかったこともあったが、一番の得意先であった岡本ノート株式会社が東大阪に移転することが大きかった。また東大阪市が企業誘致に積極的であったことも要因の一つである。岡本ノート株式会社の敷地が2千坪であったが、そのうち3百坪を買うことで、250坪を会社として、残り50坪を住居として構えた。

昭和35年6月、この東大阪に移転する時に、社名を『タカハラ株式会社』と変更し、会社は発展していった。





社員旅行 大山桧水高原

60年5月3日 3  
大山 桧水高原





社員旅行 アドベンチャーワールド  
1999.6.23日

# 全自動ライン導入

昭和40年代になると、ノートの生産の受注はうなぎのぼりで、ピークに達した。そこで発展していくにつれ、「全自動で生産する機械を導入することで生産性もアップし、人件費も抑えることが、可能になるのでは」と考えた。

そのために銀行で3千万円（現在の金額で約4億円）を借り、伊藤忠商事に仲介してもらうことで、世界唯一のノートを自動で生産する機械を導入した。たった2人の人手で2秒に1冊を生産できるようになった。



ノート全自動ライン

# 卓上日記の誕生

ノートの全自動ラインの導入により、生産性は上がったが、ノートを購入する多くが学生であったため、夏休みなど長期の休日に入ると、その期間は受注が激減し、大変困った。

なんとかこの期間をカバーし、安定して生産できるものはないかと考え、卓上日記の生産を始めた。この卓上日記の生産により、長期間のノートの受注減少をカバーすることができ、切り抜けることができた。

昭和50年になると、卓上日記の生産は人海戦術であったため、人員の不足と人件費の高騰で採算がとれなくなってきた。

そんな時、世界で初となる卓上日記の世界唯一の生産ラインを自社開発する。一日の生産個数3万個に対し、機械導入以前は50名の人手が必要であったが、導入後は2名で、2秒で1個が生産可能となり、1年を通して、ノートと卓上日記の生産が可能となった。この事で年間通してフル稼働することとなった。またこの全自動ラインにより、卓上日記の全国シェア80%を確保、これで一挙に経済成長の波に乗り、急成長を遂げた。

この機械の導入は現在の金額で5億円以上となる大金をかけ開発したが、このラインをどうしてこの時決断し開発できたのか、自分自身、今でも信じられない気持ちである。

# バブル経済の崩壊

独立して三和製本所を設立して、タカハラ株式会社へと急成長をとげ、順風満帆のように見えるかもしれないが、数々の困難にぶつかりながらも社員や兄弟、家族皆で協力し、乗り越えてきたからこそまでの成長が実現できた。

しかし、ここで大きな壁にぶつかった。それはタカハラ株式会社だけではなく、日本企業全体が大打撃となった。平成10年、バブル経済の崩壊。この崩壊により、得意先が10社のうち5社が倒産。当社も経営が成り立たなくなり、50年の歴史に幕を閉じざるを得ない状況となった。

だが、残された得意先に対し、生産供給責任と今まで支えてくれた従業員の生活のため、最大限の努力を果たす必要があつた。

そこで規模は縮小したが、長男と社員が有限会社ドウーを設立し、タカハラ株式会社の設備及び生産技術を継承した。その設立に際して私は70歳で一線から退き、その後社長であつた長男が病死のため、現在では次男が引き継ぎ、会社を経営している。

# 親兄弟の絆

私が大阪で働きたいと両親に懇願し、独立することになるまでの期間、私は知らなかったが、父は時々、荻町から単身大阪へ来ていたそうだ。私が独立した時、また家族11人全員、大阪で住むための家を父が確保してくれていた。

戦争が始まり、疎開するまでの父はというと、近所の悪友と賭博（とは言ってもパチンコ程度の内容だった）ばかりしていた。賭博場に行ったつきり、まったく帰ってくる様子がないので、母が賭博場まで娘を連れて行き、賭博場に娘だけを置いて、母は家に先に帰り、「お母さんが怒っているよ!」と娘に引っ張って連れて帰って来られるといった、子どもの私からは決して良い父親とは言えなかった。しかし、大阪に家族が来てから10年間、父はタカハラ株式会社を



手伝つてくれ、67歳で亡くなった。

大阪から見知らぬ大分まで家族全員を引き連れ、将来また一緒に住むために、と住居を購入してくれていたなど、11人もの家族を支えてくれた父は今にして思えば私にとって偉大な存在である。寡黙な父だったが、言葉を交わさずともその背中から誠実さを学び、感謝でいっぱいを持ちである。

母は家計が苦しい時、内職をし、服や田舎のものを売って、陰で生計を立ててくれ、98歳で亡くなった。

兄弟は大阪へ出た当初は、仕事を手伝つてくれたが、妹たちはそれぞれ嫁入りし、兄弟たちは各々独立し、私が、荻から大阪へ出てくる時に思った「私一人だけでも独立して少しでも家族を楽しむできないだろうか」という気持ちがいよいよ大きなものになって、親兄弟を少しでも幸せに導くことができたのではないかと自負している。

## 第二の人生編

# 歌仲間との出会い

70歳で引退後は、もともと私は酒もたばこもしない、趣味といえば空いた時間に歌を歌うことであった。河内永和駅前にある『サントス』という喫茶店で有名な作曲家の先生が歌の指導をしてくれるというのを聞き、少しでも歌が上達するのではと思った私は、サントスに通い、先生のご指導を受けることになった。

その指導を受けるうちに、「自分の歌を作ってみるのはどうだろうか」とまたもや私はふと思いつき、先生に「私が歌詞を書くので曲をつけてくれないだろうか」と頼んでみると、了承していただけた。人生60年間、ものづくり一筋に生きてきたので、作詞経験など皆無であったが、歌詞が一瞬に浮かび、一気に作詞、それを先生にお願いすると、1カ月で曲がつき、完成した。

その歌を何度も練習していると、先生から思いがけない提案を受けた。

「ご自身（私）が歌い手となり、CDを出してみてはどうか」と。

私自身で作詞したこともあり、歌うのが好きで、この東大阪を想って作った歌にも愛着があったため、乗り気であった。しかし、まずこの歌をCDとして出すにはB面が必要なので、誰かB面と一緒に歌ってくれる人はいないかと探していると、娘が作詞して、歌ってみたいと言ってくれた。こうして、平成15年、70歳で東大阪ものづくりの街を想い作詞した、A面の『匠の街』、娘が作詞し、私と娘が歌うB面の『父娘の絆』が完成し、徳間ジャパンよりCDを制作・販売することとなった。



新春スペシャルカラオケに出演

『匠の街』が完成してからは、全国のカラオケでも歌えるようになり、その先生と出会った喫茶店でもカラオケで歌う人が始めた頃、「一人の男性が『匠の街』に惚れて、私に会いたいと言っている」、と喫茶店のママから電話があった。私は近くにいたので、喫茶店に立ち寄り、詳しく話を聞くと、その男性は、匠の街の『東大阪』というフレーズが大変気に入り、匠の街を歌っていたお客さんに「もう一度歌ってくれ」と頼んでいたところ、喫茶店のママと私の話になったそうだ。

この男性はただ気に入っただけではなかったようで、この歌に感銘を受け、「応援団としてイベント時に『匠の街』を流し、踊って歌えるような活動等でこの歌を広めていきたいのだ」とおっしゃってくれた。私自身が作詞し、歌う『匠の街』がこれほどまで人を感動させることができ、心を動かすことができたかと思うと嬉しくて、これから応援団の一員になりたいという申し出を了承することにした。



布施まつり50回記念イベントに出演

# 地域のボランティア活動の矢先・・・

先日（平成26年3月ぐらい）まで東大阪市の市政だよりで地域福祉委員の募集を見つけ、定員2名の中の1名として選出され、オブザーバーとして会議などに参加していた。

委員会の構成は大学教授や地域の福祉支援団体のリーダー等、合わせて30名ほどに市の職員を加えたものだったと思う。私がいるのは場違いではないかと思いつつも、参加できたことに感謝と面々の中に自分がいることで緊張を覚えた。

最後の委員会の時に会長から全員に一言を求められ、メンバーの一人の方から「地域の支援を進めているが、孤独で自宅に引きこもっている人とのコミュニケーションが取れず、そういう方



の掘り起こしの方法がなく、困っている」と一言があつた。

そういう方々をなんとかしようとして、国、市の介護費用が増大しているのだと思った。私も一言いう順番が回ってきたのだが、そこで私は高齢者に対して、「市や地域の団体のこのような支援に対し、高齢者自体が制度に応える努力が足りないと思う。私も80歳だが、この委員会で勉強させてもらい、支援に応えることができるように各々が努力することに努めて、高齢者がいつまでも元気でぴんぴんころりとこの世を去ることができればと思う。」と言うと、会長から「高原さんがぜひともそのモデルになってください」とおっしゃっていただけた。

# 火災によるさまざまな変化と別れ

私は自分自身で会長がおっしゃってくれたことを実践していききたいと、その時、心の中で思っ  
た。

またこれ以前にも平成22年3月までも3カ所のボランティア活動をしていたことがあり、こ  
れからもっとたくさんの人の役に立てると思った矢先・・・自宅が火災に合う。その火災によ  
り、私は喉を熱風で痛め、入院、手術となった。

そして妻は糖尿病で危機的状态ということで緊急入院。また私はこれが原因で喉の手術をした  
のだが、声が以前のようには出なくなり、歌が歌えなくなった。

しかし、私はこの声が出なくなった原因でもある火災があつて良かったと思つている。声が出なくなったことで唯一の趣味ができなくなつてしまったのは残念だが、1日24時間、妻の介護で病院に一緒に行き、朝夜の注射、および薬を飲むことや血圧の計測を記録し、医師に報告することができるのである。また妻は糖尿病なのでヘルシーな食事が必要で、毎日夜はカロリーを考えた宅配弁当を用意している。

こうした日々の私の介護もあつてなのか、現在A1c（ヘモグロビンA1c）が2まで下がり、日々のデイサービスのおかげもあり、妻は日常会話や行動に関して日々回復してきている。最近では私が早朝に息子の会社に清掃に行き、帰宅するとデイサービスの送迎車を待つために自宅前に一人で立っているぐらいの状態である。

元気になることで心配することも増えたが、何よりそれ以上にうれしいのは言うまでもない。

しかし、平成22年6月には会社を引き継いだ長男が亡くなった。火災から立て続けに悪いことが起こつたため、ボランティアを続けられなくなつてしまった。私が昔の得意先の人たちを招いて、食事をして帰ってくると、長男が出先で倒れたと聞き、1カ月入院した後、亡くなった。

長男は事業を継ぐものだという考えがあつたからこそ持ち上げてきたが、もつと好きな道に進ませてあげれば良かったのではないか、長男らしい生き方もあつたのではないかと思うことがある。「お前は社長になるんや」と言い聞かせ続けてきたことがプレッシャーになつたのではと悔やんだ。昔、私が仕事に夢中で遊んであげることあまりできなかった三女も三歳の時に事故で亡くなったのだが、同じような子どもと同じ年頃の人がニュースで亡くなったのを見ると自然と手を合わせてしまう。

# 80歳からのスマートフォンでの出会い

私は80歳の時から、最新のスマートフォンを活用している。同世代の方々はガラケー（ガラパゴス携帯電話）と呼ばれる携帯電話の使用も困ると聞くが、携帯電話を買い替える時に亡くなった長男からスマートフォンが良いと勧められたことが持つきっかけになった。

また私自身も最新の機器に興味があったので、携帯ショップに何度も行ってはわからないことを聞き、インターネットで検索や思いついたことをすぐにメモするために用いた。スマートフォンを使っていると知らないことが分かるようになり、このスマートフォンを持ったことがたくさんのお出会いにつながり、私の生きるための目標をより多く見出すこととなった。

現在はＩＴやロボットが活躍する時代であり、高齢者もこのＩＴの世界に出遅れず、意識改革の必要があるように感じる日々であった。

# 『匠の街』で健康体操

自宅が火災にあつた後、妻は入院していたが、退院してからは週4日デイサービスでお世話になることとなった。

私は80歳の誕生日を迎えた時に、火災と妻の介護と自分自身の体調不良から少しは回復したものの、気がついて見るとすべての人とのつながりが消え、孤独になっている事に気づき、人生の絶望を感じた。

「これから自分自身は、これ以上何故生きるのか？」と自問自答していた。

その時に本屋さんで買った本の中に、

「『人間は生きるだけ生きる』、あなたの寿命は神様だけが知っている。それまでは人生をまっとうしなさい。」とあった。

しかし、私にはその答えは見つからず迷っていた。

私が妻の介護や自身の病気のことと疲れていたのを見かねた福祉関係の方に、「高原さん（私）もデイサービスに入って少し自分を労ってみてはどうか」とおっしゃってもらい、その提案を受け入れることにした。私は妻と一緒に、週に2日デイサービスに通うこととなる。

最近、高齢社会とよく言われているが、デイサービスで初めて介護を受けている姿を見て私は唖然とした。現状では、人間は生きたくなくても100歳を超える時代だが、これから高齢とどう向き合うのかの『疑問』を持った。その時にデイサービスに通うことで次の人生が見えてきた。

デイサービスでは口の体操やリハビリが行われ、心身ともに少し健康になってゆく感じがした。リハビリのために簡単な体操をする『健康体操』があるのだが、利用者の人たちはとても楽



しんで体操をしていた。

これをヒントに私は体操に参加しながら「以前私が作詞し、歌手をしてCDを出した『匠の街』でこの体操ができないだろうか」と考えた。私は思い立つたらずぐ行動に移すことが大切だと思い、すぐにスマートフォンを使い、インターネットで検索した。スマホで検索して振付をしてくれそうなところに電話をしては依頼してみるのだが、5、6件あつたもののまったく相手にしてもらえず、たつた一社、真美健康体操協会の先生だけがわざわざ私の自宅がある最寄駅まで足を運んでくれ、娘と二人でお会いすることとなった。

その先生は当初、演歌で健康体操などしたことがないので、断るつもりであつたそうだ。しかし私とお会いし、「人柄に惚れ込んだ」とおっしゃってくれ、振付の依頼を受けてくれた。

こうして匠の街の健康体操は完成した。匠の街の健康体操の発想は自分自身の健康のため、また年齢が70歳、80歳となる、東大阪在住の方、日本の復興や経済発展に尽くした人たちが少しでも長く健康に生きることができるようになると思い、作つた作品である。

この健康体操は[YouTube \(https://youtu.be/IuMEuzEV5Xk\)](https://youtu.be/IuMEuzEV5Xk) なども見ることができるのだが、匠の街の健康体操は全国で再生回数が合計5万回（2017年7月現在）にも上っている。

この健康体操の誕生により私には夢と希望が湧いてきた。

運動の効果には、

「体を動かす事で様々な体のパーツが元気になる」

「心肺が丈夫になり血液が浄化される」

「脳の活性化やうつ病にも効果を発揮する」

などなどがあると言われています。

『匠の街の健康体操』は椅子に腰をかけたままでもできます。

演歌で健康体操を始めて、続けてみてください。

# 妻への想い

先述したのだが、私は自宅が火災に見舞われた。その火災で妻が負傷し、病院へ搬送され、検査することになった。その検査により妻は火災とはまったく関連のない高血糖が発覚し、血糖値の検査器限界の500単位では計測できず、最終的に血糖値が1100まで上がり、医師に即入院しないと、危篤状態であるとまで言われたほどだった。

その原因を調べると以前から妻は糖尿病で病院から薬をもらっていたのだが、自信過剰な性格だったこともあり、薬を飲まないでいたようだ。それがこの火災により、病院でわかったため、災い転じて福となすとはこのことだと思った。

しかし、その後は糖尿病と認知症になった妻を24時間介護しなければいけなくなった。私は妻の介護だけでなく、火災から続く出来事や自身の病気のこともあり、心身ともに疲れ、人生を諦めつつあった。

生きるためには妻の介護が責務である。

妻の介護の内容としては、朝夜の食事および血糖値、インシュリン注射、そして薬の手当を日々記録すること。この日々の妻の介護に携わることで、初めて私が現役で働いている時の妻の苦労の大変さを実感した。妻は50数年間、家庭を守り、子どもを5人も育て上げ、従業員20名の日々の食事を作ってくれていた。これには現在も「大変苦労させられた」とぼやいている。

私は家庭を振り返ることもなく、仕事一筋で頑張つてこられたのは自分の力ではなく、妻のおかげだったのだと感謝している。妻に対する感謝の気持ちは今後の人生と介護に全力を尽くし、恩返しをしたいという一心である。

日々介護をしていても妻は私が現役の時に苦労を掛けたことだけは鮮明に記憶に残っているように、厳しい言葉をぶつけてくるが多かった。しかし、2〜3年と妻の介護を懸命に続けて

きたことで、妻もようやく許してくれたのか「ありがとう」と感謝の言葉を言ってもらえるようになった。

妻は認知症であるが、日常会話ははつきり話し、最近のことはすぐに忘れても昔のことや節目、節目の大切なことは前述した私への不満と共に覚えていているらしい。私が覚えていている妻との思い出といえば、子どもたちのこともあるが、多くは仕事関係のことが多くなってしまう。それは私が仕事にばかり時間を割いてしまっていたためだ。そのため妻は衣料店で高級な衣服を購入することでストレスを発散していたらしい。現在もデイサービスで周りの方に服装を褒められると嬉しそうな顔をする。

子どもたちの教育から家庭のやりくりまですべて妻に任せていた。100歳以上が6万人を超えるといわれる世の中だが、私は妻と100歳を超えても人生を共に歩きたいと心から思う。

これはお金があるからといって叶うものでもなく、2人で子どもや孫たちを見守ることができるのはなによりの幸せであると考えからである。人間の寿命は決まっているが、どんな人生でもこの世を去るまでは2人で支えあい、いつまでも健康に、この世を去ることができればと思

う。

そして叶うならば来世でも妻と巡り合い、また夫婦として共に寄り添えあえれば、これ以上の幸せはない。

## 第2の故郷、豊後荻町を訪ねて

私が12歳の頃に大阪の東成から家族全員で疎開し、17歳まで生活した第2の故郷、豊後荻町。

8年前にその当時を懐かしんで、私の人生の信条となった中学校があり、当時住んでいた荻町を訪れた。田んぼや畑一面のあの頃よりも過疎化し、すっかり変わり果てていた。

懐かしい場所を歩いていると、偶然にも荻町に住んでいた頃、近所に住んでいた西村さんが、「高原さんやろ？」と声をかけてくれ、何十年ぶりの再会を果たした。私の知っている西村さんは少年時代の面影だけであるが、声をかけられた方を向くと昔と変わらず、一目で西村さんだと

わかった。

17歳のあの日、私は両親からもらった少しのお金を持ち、この町の風景を電車の窓越しに見た。窓からみた風景は、その時に抱いた気持ちと共に私の心の中にしっかりと記憶されている。





緑が丘中学校を訪ねて



# 人生を振り返って思うこと

高齢化社会と言われているが、この言葉が一人歩きしているのではないだろうか。

私も妻もデイサービスに通っていることもあり、たくさんの方とお会いしますが、70歳以上の要支援の人たちに『コミュニティカフェ』や『コミュニティーサークル』等を活用することで、金銭的にも、そして介護をする家族の負担も軽減することができ、将来ぴんぴんころりとこの世を去ることができると考えている。

また、人と関わることがなくなっていくと自宅に孤独にひきこもり、うつ病や認知症といった介護の障害が増える恐れがある。私より若い現役の人たちが何かを始める時には『夢と希望を見

出し、挑戦する』ことが大切だと思う。

私自身も世間から見ると高齢であるが、挑戦するための希望・夢が見つかったのは、何よりも人と人との巡り合いが良かったからだと思っている。

私の人生は人との出会いに恵まれた人生であった。人間一人ではなににもできないのだ。大きな夢を持ち、掲げてても、幾度となく壁にぶつかる。その壁を乗り越えるのか、そこであきらめてしまふのかすべては自分次第だ。

しかしそんな時に私の周りには妻や兄弟を始めとし、支えてくれる人たちがいた。

「こんなにつらいならやめてしまいたい」「なぜ自分ばかり・・・」と思えば思うほど、この歩みは止まり、進むのがつらくなる。しかし周りの人たちは私の背中をそっと押して、私の歩みのために陰ながら尽力してくれた。

その人たちに応えるためにも歩き続けなければならぬ。これから歩みを進めることによって少しずつ支えてくれる人たちは増えてくるだろう。就職難や不況などというが、産まれた時代を

恨んではいけない。そして思い通りにいかなくても周りのせいにはいけない。

自分たちの手で自分たちの時代を築いていくのだ。私もあと何年健康で活動できるのかは私自身もわからない。しかしその中でできることを見つけたからには、これからその夢に向けて必要なことをひとつひとつ実践し、チャレンジ精神を持ち、少しでも世の中のため、そして自分自身の健康のために生きていきたいと思う。

今振り返ってみて行き詰まりや不幸があればこそ、私はこの人生を思う存分生きてこられたように思う。

最後に今一度自分の生きたその時その時に会った人たちに心から感謝したい。

# 第三の人生の挑戦

# シニアのベンチャーとして

平成26年4月1日『[コミュニティサークル匠の街](#)』を立ち上げました。

私の作詩した歌が10年来歌い続けられ、[健康体操のユーチューブ](#)で何万回と視聴回数が伸びて来ており『匠の街』の知名度が上昇しているので『匠の街』をブランドとして活用することになりました。

『コミュニティサークル匠の街』の活動内容を、現在『匠の街』ブランドで発売中の『卓上日記型』商品と共に、ご紹介します。

# 平成28年6月 第1号 元気日めくり 365 を販売開始。

私が過去に卓上日記製造ラインの開発をして、商品1個の生産が2秒で仕上がるようになり、市場80%の生産シェアを誇っていますが、従来の卓上日記は年号があるので販売期間の制約があり、年内に販売出来ないとロスとして販売先から返品されるリスクがありました。

この技術を活かしつつ、返品リスクを無くすためにリニューアルして、販売期間の制約の無いいつからでもその日から始められる、『[元気日めくり365](#)』を開発し、発売を始めました。





未来の  
ためには、  
いま選ぼう。

今日の出来事・元気が出る言葉 365

# アイデア次第でとっても便利なカレンダー



その日から1年間 (365日) 役立ちます!

# 匠の街 元気日めくり 365

コンセプトは『高齢社会において健康寿命を伸ばすために、お役に立つ卓上日記』です。毎日、日替わりで元気の出る言葉、今日の出来事をオリジナルで製作、その他1日に必要な記録ができて、家族ぐるみで利用できる商品です。

卓上日記は、数100万個の市場であるので少し売れば投資費用は回収出来ると始めましたが、販売先の開拓から始めなければ売れないので頭打ちになりました。色々対策を検討した結果、現在の生活状況と消費者の心理状態は生活に最低限必要なもので無ければ、生活に特に必要でない商品はアイデアがあっても買ってもらえる状況ではありません。

これからの販売戦略として、社会貢献として温暖化防止に協力し、環境貢献型商品の認定を受けました。また、交通事故防止対策として、大阪府の免許返納者に対して支援する企業等の認定を受け毎週、『元気日めぐり365』を進呈しています（[大阪府のホームページ](#)）。

私たちはシニアのグループですので人海的な販売活動は出来ませんから、苦肉の策として『IT』戦略で行こうと決断し、行動開始しました。

始めは『[コミュニティカフェひだまり](#)』の利用客にパソコンの使い方を習い、パソコン持参でパソコン教室を歩き勉強を重ね、ネット販売のシステムを『[匠の街](#)』独自で開設し、あらゆるネット媒体に発信とネットショップ登録し販売開始しました。

『地球の温暖化防止対策の推進』と『まちづくり』に貢献！！ を商品の販売と一緒にPRしていきます。

購入して頂いた代金の一部を大阪府の森の保全活動に寄付しています（カーボン・オフセット）。環境省の『[カーボン・オフセット宣言](#)』のホームページにも掲載されています。

# 平成28年10月 第2号 元気日めく り365（木製版）開発・発売。

日めくりの内容は第1号と同じですが、環境貢献をさらに進めるために、『元気日めくり365』の台を国産ヒノキ間伐材で作りました。国内産の森林材を有効活用することで、森林の活性化と二酸化炭素吸収に貢献します。この商品は、『[元気日めくり365（木製版）](#)』として販売開始しました。



国産ヒノキ間伐材の台は人づてに知り合いになった会社にも、愛知県額田（ぬかた）産の間伐材を使って作ってもらいました。包装を開けた時に、とても良いヒノキの香りがしたので「気持ち安らぐヒノキの香り」をキャッチフレーズにつけました。

第1号商品で保全活動に寄付している大阪府の森林に加えて、『世界遺産富士山』の森林を守ることに賛同している『環境貢献型商品』です。購入して頂いた代金の一部を大阪府と富士山麓の森の保全活動に寄付しています（カーボン・オフセット）。環境省の『[カーボン・オフセット宣言](#)』のホームページにも掲載されています。

# 平成29年5月 第3号 卓上日記型メモラグビールール365 開発・発売。

第2号商品の木製台はそのままに、メモの内容を変更して新しい商品ができないか、考えました。『匠の街』の開発商品は、ただ商品を売るだけではなく、商品に多くの情報を折り込んでいます。『コミュニティサークル匠の街』がある、東大阪に關係する情報をメモに折り込みたいと考えました。

ラグビーに詳しい方なら知ってて当然かもしれませんが、日本初のラグビー専用スタジアムが東大阪市にある『花園ラグビー場』です。全国高校ラグビーの大会がこの『花園ラグビー場』で



毎年開催されています。東大阪市は『ものづくり』の匠が多い街ですが、ラグビーの街でもあります。

第3号の商品は、この『ラグビー』の情報を卓上日記型メモに折り込むことに決めました。2年後の2019年9月にはアジア初のラグビーワールドカップが日本で開催されることが決まっています。もちろん、ワールドカップでは東大阪の『花園フグビー場』も使用されます。

このラグビーワールドカップの東大阪開催を応援したいと思い、ラグビールールや豆知識を記載した日めくりメモ仕立てにすれば、普段ラグビーになじみがない方にも、ワールドカップを楽しんでもらえるのではないかと考えました。また、東大阪にやってきた英語圏の人にも手にとってもらえるように、日本語・英語の2カ国語で表記をしています。第3号商品は『ラグビールール365』と名付けました。





気持ちやすらぐヒノキの香りする卓上メモ

# 卓上日記型メモ

環境貢献型商品

## ラグビールール365



ラグビーのルールや豆知識が毎日わかる！



気持のよい、やさしい。

# RUGBY RULE 365

毎日の  
ルーチンに  
トライしよう！

日本語版/英語版

さらに、地元企業が粗品やノベルティグッズとして使えるように、各種オプションサービスも考えました。

- 企業様には、会社の宣伝のネームプレートの張り付けサービスも行っています。
- 企業のメッセージおよび動画のコミーシャル付のQRコードの貼り付けを致します。
- 粗品をただ差し上げるのではなく、心のこもった動画のメッセージおよび、自社の最先端の商品や技術・生産ラインの動画をQRコードでお届けする事によって、販売の為に宣伝媒体に最大限活用することが出来、販促にもつながります。匠の街の商品を心のこもった贈り物兼宣伝媒体として、販売促進に最大限ご利用下さい。
- 匠の街では、HANAZONOラグビーのロゴ及びトライ君のイラストを入れた応援シールを貼り付け、東大阪花園ラグビーを応援しています。
- 匠の街の健康体操の動画のQRコードをサービスで張り付け、皆様が自宅で健康体操が出来るようにしています。

このようなオプションサービスを、企業向けに考えました。

# あとがき

私が心に留めている4か条です。

- 一、今を生きる
- 一、空気を読む
- 一、夢を楽しむ
- 一、あきらめない

現代はまさしくIT社会、<sup>①</sup>IT<sup>②</sup>という言葉もすっかり定着した。アナログ・デジタル・ローテク・ハイテクなどの言葉も耳に馴染んできたようだ。さらにITは『ICT』と通信（コミュニ

ニケーション）が加わった表現をするそうだ。またIOT（モノのインターネット）の技術もビジネス分野の活用のみならず、私たちもその技術の恩恵を受けることになってきている。さらに、ここにAI技術を掛け合わせる研究なども進み、まさに夢の実現が期待されている。自動車の自動運転など、その実現が待ち遠しい。このような技術に支えられる近未来社会を謳歌したいものだ。

ものづくりは『歌』づくり。歌づくりは『もの』づくり。  
ものと歌は一体である。

平成29年8月吉日

高原 成國

『東大阪卓上日記の匠 人生八十年の記録…ものづくりは『歌』づくり 歌づくりは『もの』づくり』

2017年8月 初版発行

著者…高原成國 ([コミュニティサークル匠の街](#))

出版協力…

坂上やよひ (エンジニアパソコンクラブ)

清水龍 ([兵庫県広報情報センター](#))

Copyright(C) 2017 Narikuni Takahara All Rights Reserved.